

大阪弁とその歌

34期生

I テーマ設定の理由

僕達が、普段なんの気なしに使っている大阪弁。しかし、その実体を詳しく知ろうとすることは、なかなか難しい。そこで今年は少し変わった角度から、すなわち大阪弁の歌を検討することによって、音楽を通した大阪弁の特徴を調べてみよう、そういう風に考えて、このテーマを選んだ。

II 研究方法

- (1) 大阪弁の歌を探して、その中味を調べてみる。
- (2) (1)のまとめ
- (3) (1)(2)を参考にして、自分で実際に共通語の(いわゆる普通の)歌を大阪弁に直したり、大阪弁の歌を共通語に翻訳してみたりする。

III 研究結果


- (1) 資料となる歌は、次のとおり。
 - 大阪で生まれた女 作詞=BORO 作曲=岡山準三・BORO 歌★BORO
 - チコタン 作詞=蓬萊泰三 作曲=南安雄
 - 日記のうた
 - チューリップのアップリケ 作詞=大谷あや子 作曲・歌=岡林信康


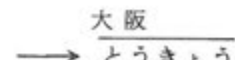
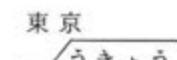
「大阪で生まれた女」は、1980年頃のヒット曲。その次は、蓬萊泰三、南安雄コンビによる、子どものための合唱組曲三部作のうちの2曲。かなり大阪弁が意識されていて、メロディーの面でもほとんどアクセントに忠実だし、いろいろな工夫が凝らされて、大阪弁の雰囲気がよく伝えられており、最も参考になった。今年の音楽会でも、一年生がこの歌をとりあげていたので、曲の感じはつかんでもらえると思う。最後の「チューリップのアップリケ」は往年の(?)フォークのヒット曲。


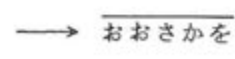
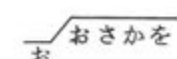
このように、実際に探してみてもわかったのだが、大阪弁の歌というのは、古くから伝わる民謡などを除けば非常に少ない。現代の大阪弁を調べる、ということでフォークソングなど新しい歌を主に探してみたが、そうすると数はごく限られてしまう。そこでしかたがないので、まず一曲一曲の内容を細かく見ていって、後から全体をまとめて考察する、という方法をとったが、ここでは省略して、全体の大まかな傾向を述べることにしたい。


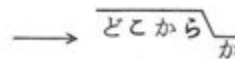
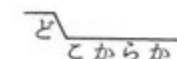
A. 歌詞のアクセントとメロディー

(アクセント……言葉—この場合は大阪弁—が話される時の上がり下がりのこと)

◎次にあげるように  といった平板なメロディーが多く現われている(Ex-1~3)。




Ex-1  → 大阪  とうきょう / 東京  うきょう
と

Ex-2  → 大阪  おおさかを / 東京  おさかを
お

Ex-3  → 大阪  どこからか / 東京  ところからか

(以上「大阪で生まれた女」)

このように、「大阪で生まれた女」の中には単語の音の高さが最初から最後まで同じ、というものが多くでてくる。東京アクセントの場合上図に示すように、語の最初の音とその次の音とは必ず高さが異なる。そこで「平板性」が大阪弁の1つの特徴ではないかと考えられてくる。

ところがこの曲では、16分音符の  が、アクセントに合わないところにも多く使われている。つまり、 が音楽的な一つのモチーフのような役割を与えられているといっていだろう。上にあげたようにアクセントに合わせて曲を作っていくと、 というパターンが多く現われるために、それが自然に曲のモチーフとしての地位を与えられるようになったのだと思う。


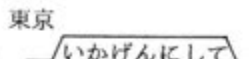
◎平板なメロディーは、「チコタン・日記のうた」の2曲にも多く出てくるが、特に単語だけでなく、文全体が平板的なものもある(Ex-4, 5)。

Ex-4  Ex-5  ※(チ)…チコタン より
(田)…日記のうた

どないしょう どないしょう ほっといてんか

◎平板なメロディーを含むものの中に、次のようなものがある(Ex-6)。

Ex-6  ↑1オクターブ

大阪  えいかげんに しいな / 東京  いかげんにしてよ

大阪弁で「えいかげんにしいな」と言う場合、最初「えいかげんに」を低く、ドラドラと始まって、「し」で突然ピョコッと上がるので、その音の上がり方が大きいように感じる。それは、メロディーにもよくあらわれていて、「し」から音がちょうど1オクターブ上がっている。東京式に言うなら「いいかげんにしてよ」ぐらいだろうか。これには、大阪弁のよう

に音が急に上がったりすることはない。

もう一つ例を上げてみよう。

Ex-7

ここでは、「おとなに」を「となに」というメロディーにしている
 いるが、僕は「おとな」と言う。
 これらは「チョコタン」「日記のうた」の中に多く見ることができる

おとなになら (デコボコ) おとなになら (きれいな山)

が、つまり大阪弁では、平板なうちにもときどき「高くて鋭い山」が飛び出しているように思える。それらの部分を共通語で考えてみると、鋭い山はなく、むしろ「平たくて低い山」が連なっている、という感じだ。

B. リズムについて

◎「ん」とリズム

大阪弁には「ん」が多く使われる。

この「ん」は、まことに柔らかく優しい感じを与え、聞く人の心をなごやかにするものであり、大阪弁のもつ柔和性は、少なからずこの「ん」にも負っている、らしい。(前田勇「大阪弁」)

「大阪で生まれた女」にも「大阪の街よう捨てん」「東京へはようついていかん」と出てくるが、いずれも「ん」に1つの音符をあてている。しかし、実際話すときに「ん」は前の音とくっついて、その部分は早く、ひとかたまりのように言われると思う。そこで、次のようにメロディーをつける方がベターだろう。

Ex-8

◎さて、そのように を使った例は、「チョコタン」「日記のうた」にたくさんでてくる。つまり という形があらわれ、そこは長さが長くなるので、符点やシンコペーションなどのリズムが生まれる(Ex-9)。しかし、これらはその次の例のように、促音によって符点やシンコペーションになる場合と違って聞いた感じが「重い」。なぜなら、Ex-10は「っ」にあたるところで音がぬけて()の中のように歌われるので「跳ねた」リズムになる。

Ex-9

Ex-10

ところが楽譜上は同じでも Ex-9 では という風に、符点の真ん中の部分にも音「ん」がつかまっているために、ドテッとした感じになる。

この辺は、言葉では非常に表わしにくいのだが、なんとなくでもその雰囲気がつかんでほしい。そして、大阪弁の歌の中では、Ex-10のように「っ」などから生まれたリズムよりも Ex-9 のような「ん」によって生まれたリズムの方が、圧倒的に多い。このことから、実際の大阪弁でも「重い、ドテッとした」リズムがたくさん聞かれるのではないかと考えられる。それに対し、東京の言葉では、「高くて」を「高くって」というようにつめて言うことが多い(前出「大阪弁」)から、リズムの面でも大阪弁と東京弁の違いがあらわれていると思う。

C. イントネーションなど

言葉のイントネーションや、実際に言うときの雰囲気(速く、つまって言うか、やんわり言うか)が、曲の中でどう表われているかを調べた。しかし、これらは、普通全曲を決まったビートが支配し、テンポや拍子の変化のあまり行われないポピュラー系の音楽では、かなり表現しにくい。そこで参考程度に、工夫されている例をあげておく。

Ex-11

- 強く速く言う(Ex-5の「ほっといてんか」も)
- 語尾を上げて呼びかけの雰囲気
- Ex-4の、繰り返して調子が高まっていく感じ

(2) ここで(1)で調べたことを簡単にまとめてみたいと思う。

1. 歌の中からわかる、大阪弁の特徴的なこと

- ①最初からずっと同じ音が並ぶ「平板なメロディー」(単語及び文全体)が多い。
- ②低く平板なメロディーの中で、急に音が上がってまた下がる、つまり鋭い山ができることがある。
- ③歌の中にあられる符点、シンコペーションなどのリズムには というように、「ん」が前の音にくっついてできるものも多く、このリズムは 符点といっても東京弁などでよく出る など、促音によってできるリズムと違って、非常に「重い」感じがする。

資料が少ないため、これが一般的な特徴とはいえないが、調べた曲の中からは大体上のようなことがわかった。

2. 大阪弁の歌を作るときに注意すること・工夫すること

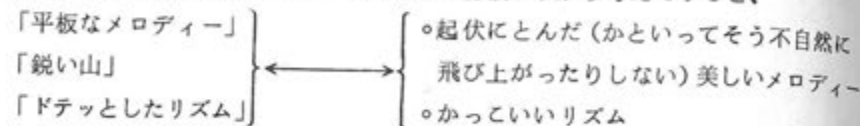
- ①1の特徴をうまくいかす。
- ②大阪弁では1音語を長呼するので、その点にも注意して、メロディーをつける。
例. あんた、目エ悪いの……目が2音分の長さに言われる。
- ③これは、大阪弁に限らないが、実際の言い方をよくあらわすように、例えば呼びかけのときには語尾を上げたり、強く言うときには、音符を短くしたり、一つの音符にたくさんの文字を入れたり、アクセントをつける等のいろいろな工夫(これは、詞が話し言葉である、というのを前提としている。ただし曲調によっては、こういう工夫が無理な場合もあるだ

ろう)。

3. 大阪弁の歌は、なぜ少ないか(発展)

① メロディーの面……大阪弁は、僕らが普段、歌ったり聞いたりする音楽には、なりにくいのではないか？

大阪弁をいかした歌を作ろうとすると、当然その言葉の特徴があらわれてくる。それがどんなものか、簡単には言えないだろうが、1.にあげた特徴だけから考えてみると、



② 歌詞の面……滑稽味

大阪弁といえば、漫才などに代表されるように、ユーモアや滑稽味が第一に思い出される。この言葉でシリアスな歌を作ろうとしても、どうしても異和感が残ってしまうのは、しかたないだろう。

③ 現代の日本の状況

現代の歌謡曲などは、売るためにあり、売れなければ商売にならない。大阪弁の歌は、地方では支持されても、全国的に売るのは難しい。どうしても、中央を基盤としなければならないだろう。

④ 上のような理由から、「大阪弁の歌なんか作ったって……」という発想が多かったこともあると思う。

(3) ここでは、既成の曲の歌詞、あるいはコード進行、メロディーの一部を借用させてもらい、それを大阪弁に直して、自分で曲を作ってみた。

例1. 猫ふんじゃった

まず、きわめて簡単な例だが「猫ふんじゃった」の冒頭部分を大阪弁にしてみた。

この曲は外国の曲だそうだが、日本でもこれだけ定着しているのは「ネコふんじゃった」という歌詞と曲のイメージが、ぴったりしているからだろう。「ふんじゃった」の軽い響きと というリズムが、よく合っている。

これが大阪弁になると、「じゃっ」というところに「でもう」がきて、長さからいっても大体3倍になる。当然その部分が、ドタツとして軽さはなくなってしまう。

例2. なごり雪

他にもニューミュージック系の曲などを中心に、何曲か作ってみたが、1つだけ楽譜を載せておく。

元の曲からして、メロディーが平板的からだかもしれないが、原曲によく似ている、という点を差し引けば、自分ではかなりいい曲ができたと思う(大阪弁の雰囲気や歌にあらず、と

いう意味において)。

例の平板なメロディーは、出だしのところからたくさん登場するが、特に、「語りかける」というのには、適した曲想だろう。

IV まとめ —大阪弁とその歌について—

(1)の研究については、(2)でまとめをしたので、ここでは「大阪弁の歌」ということについて大きくまとめてみたい。

1. この研究ではあまりふれなかったが、大阪弁の大きな特徴である、ユーモアや滑稽味、それらを十分に生かした「おもしろい歌」が、もっともっと出てきてほしいと思う。
2. 逆に美しい歌、かっこいい歌についてだが、たしかに大阪弁では、軽さや歯切れのよさは表わしにくく、その意味では「かっこ悪い」といえる(「猫ふんじゃった」等)。しかし、「なごり雪」で示したように、自分の気持ちを語りかける、心の奥から粘っこく話す、けっしてかっこよくはないけれど、そのような雰囲気を表わすのには、よく合っていると思う。これから大阪弁の「いい歌」が出てほしい。

V 感想

まず、最初の大阪弁の歌を調べる段階で、資料が少ないのに大変苦労した。こんなにも大阪弁の歌が少ないとは思わなかった。そのため、一応内容を検討したものの、「大阪弁の特徴」と一般化して言いまわることができるまでいかなかったのは残念だ。

また、この研究で改めて歌の雰囲気を言葉で表す難しさを感じた。リズムが重い、軽いなどというのは、説明のしようがない。自分で実際にしゃべってみて、それを耳で聞いて少しでも感じをつかんでもらえればいいと思う。楽譜もたくさん出てきたが、それはあくまでも一つの表現手段であって、大事なものは歌った感じ、聞いた感じだ。

最後に僕達大阪人としては、大阪弁の歌がもっともっと出てきてほしいと思う。また、これから機会があれば、僕自身も大阪弁の歌を作っていきたい。